The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	海外帰国子女「文化」に関する一考察 : 適応とコミュニケーション・ギャップについて
Author(s)	伊藤, 義之
Citation	年報人間科学. 1984, 5, p. 145-164
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8538
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学人間科学部〔一九八四年二月〕
『年報人間科学』第五号　一四五頁―一六四頁

海外帰国子女「文化」に関する一考察

――適応とコミュニケーション・ギャップについて――

伊藤義之

海外帰国子女「文化」に関する一考察

——適応とコミュニケーション・ギャップについて——

目　次

はじめに
第一章　海外帰国子女の実態
「海外帰国子女」とは何か
海外及び日本での彼らの属する文化
海外帰国子女の「文化」
帰国子女の社会・教育環境
第二章　帰国子女を受け入れる日本文化
日本文化の「人種」観
日本文化の画一性志向
日本の教育制度
第三章　適応とコミュニケーション
適応の概念
適応と同化
コミュニケーション体系の捉え方
適応とディス・コミュニケーション
第四章　帰国子女研究の方法論的考察
帰国子女研究のイーミック・アプローチ
非言語的コミュニケーション研究の課題
おわりに
註
文献

はじめに

海外帰国子女とはその社会化の時期のある期間を国外で過し、在外時は現地文化への、そして帰国後は日本文化への適応を課される子供達である。彼らは在外中は家庭の内と外の二重の文化的環境の中でマルチ・カルチュラルな様式を身につけ、それゆえ帰国した後は「画一性志向」の日本社会の中で他者、或いは異質な者として認識される。従来、彼らの適応は言語面、教育面における問題として捉えられることが多かったが、実状はそれにとどまらず、「ディス・コミュニケーション」一般の問題に拡大して把握することが望ましいと思われる。本稿ではコミュニケーションの体系を言語と非言語の両体系の統合されたものとして捉え、特に従来見過されがちであった非言語システムを強調し、その認識的アプローチの可能性を追求する。

第一章　海外帰国子女の実態

「海外帰国子女」の意味

先ず海外帰国子女として一般に研究者が把握している対象の範囲の検討に際し、次の様な定義を示したい。海外帰国子女とは「両親に伴われて海外に一時的に滞在する子どもたち」(小林、1981:3)である。この定義は包括的かつ弁別的であり、この集団の境界設定に役立つ。「両親に伴われる」彼らは、留学生の様な単身でしかも自分の意志で海外に滞在する者とは異なり、また日本文化を身につけた「両親」とともに生活するからには在外中も常にある程度日本文化とのつながりを、例えば家庭内で用いられる言語などで、保っている。また「一時的な滞在」は海外帰国子女に日本国籍があることを意味する。つまり、永住を目的とした移民や引揚者の子女とは区別され、同時に外国人移民子女とも一応区別されている。「子どもたち」とは、文化化、或いは社会化、が完了していない者という一般的な理解でよいと思われる。この点でも彼らは留学生と区別される。

この様に、海外帰国子女として捉えられる対象は留学生や外国人移民、引揚者子弟らとは一応区別して考えられている。しかし、例えば国際結婚をした者の子女や日系一世と二世を親にもつ子弟の様に、片親のみが日本文化を備えている場合など、境界線が曖昧になる要素も多い。ただ、現実に即して言うならば、こうしたマージナルな者は数多くなく、殆んど問題にならないと言ってもよい。むしろ海外帰国子女はその殆んどが両親の勤務地が海外であったために一時的に(期間は様々だが)国外に居住している者であり、そのため海外勤務者子弟とほぼ同義とも言えるくらいである。

本稿では海外帰国子女をこの、小林の定義に従って考えていく。また海外帰国子女とは在外中の子女(「海外子女」)及び在外経験をもつ「帰国子女」を含むのが通常だが、本論では特に帰国子女に焦点を合せていくことをここで述べておきたい。

海外及び日本での彼らの属する文化

右に述べた通り、一般的に彼らは日本人を両親として持っており、そのため海外子女の家庭環境は、現地文化の影響を受けながらも、基本的には日本文化と言ってよいものである。それに対して家庭外では、特に子女の選択する現地での就学方法によって、帰属文化の多様性が見られる。彼らには現地校、日本人学校、補習校などの選択の幅があるが、そのどれに通うかによって文化的意識が変化するのは至極当然である。しかし極く一部の例外を除けば現地の文化環境との接触のない者はなく(1)、海外子女の大多数はマルチ・リンガル(複数言語使用者)でマルチ・カルチュラルであると考えられる。

では日本に帰って来た場合はどうだろうか。基本的には日本文化の中に置かれ、彼らがそれに直面するのは当然の事実であるが、多くの場合それに加えて、帰国子女達はある特殊なサブ・カルチャーの中に身を置くことになるようだ。すなわち、帰国子女であることによる彼ら自身の意識、周囲の子供や大人達のとる態度、及びそれらの間の相互作用などが、滞在国、期間、年令等の違いを超えて、帰国子女を日本文化の中の特殊なサブ・カルチャー——帰国子女文化——の中に彼らを位置づけるのである。帰国子女文化の形成を促進するものの一つに彼らに対する適応教育(実際は同化教育)があ

るが、教育環境の問題については後で検討する。その前に、帰国子女文化と筆者が名づけたサブ・カルチャーについて、その存在と性格を先ず考えてみよう。

海外帰国子女の「文化」

ひと口に海外帰国子女と称される者もその範疇に属する者の幅は広く、三万五千人以上（一九八三年五月現在、文部省調べ）の海外子女が世界各国に散らばっている現在、滞在年数、年令、滞在国数、就学状況などにも大きな変差がある。帰国子女の中にも現地で生まれ初めて日本に「帰った」者もおり、帰国時の年令や帰国後の経過期間等においてバラツキが大きい。これらは海外帰国子女自身の異質性であるが、帰国子女をとりまく日本における周囲にも多様性はある。なかでも帰国子女の学校教育は帰国子女文化のあり方に深く関わっている。帰国した児童、生徒は日本の学校に編入することになるが、彼らの学校選定の際の選択肢の一つが、いわゆる帰国子女受け入れ校である。これは帰国子女の教育を専門的に研究、実践しているところであり、大別して帰国子女のための特別編成クラスを持つ学校と一般児童、生徒の中に帰国子女を混入させるシステムを有するもの、及びその両方を兼ね備えたものがある。しかし二、三の例外を除いて受け入れ校は首都圏と京阪神に集中しており、現在のところ帰国後それ以外の土地に居住する者は必然的にその他の一般の学校に編入する手段をとる。外国語を解する者が一人もいない学校に編入した者と、同じ様な在外経験を持つ者が何人もいる受け入れ校に編入した者、その中でも特別クラスに入った者と混入クラスに入った者では、周囲の環境に少なからず相違があるのは当然だ。

では逆に、一見まとまりがないように思われる、これらの多様な子供達を一つの文化として認識させ得るほどの彼らの同質性はどの点に見出だせるだろうか。

海外帰国子女の両親の殆んどは日本企業に勤めている企業現地派遣員であり、学歴も平均して高い。生活環境については、例えば日本人は同じアパートにかたまって住む、といった様に日本人同士は互いに突出しない様、他の日本人との釣り合いを考えて生活の場を選び、つくり出す。その場合多くが企業派遣員であり、年令も近いため住環境も似たものになっていくのである。しかし、海外帰国子女の同質性の問題は彼らの在外経験の相似性よりも彼ら自身の中により求められる。日本文化の視点から眺めた場合、彼らの同質性は彼らが等しくマルチ・カルチュラルだという点にある。これは一般の在外経験のない日本人から見れば全く異質の特質であると同時に、海外帰国子女の間では共通した、同質的な特徴である。この事実から、例えば多様な価値感を備え、多元的なものの見方、異なる文化に対する寛容を身につけている、といった共通点を彼らの間に見出だすことができる。

海外帰国子女自身のもつこれらの特質に加え、彼らの同質性を促進するものに、帰国後の彼らの周囲、という要素がある。前述した帰国子女の環境の異質性にも拘らず、周囲が彼らを日本文化の中で位置づけを行なう、そのやり方には一定のものがある。帰国子女は

「日本人」である（生物的、法的）と同時に「日本人」でない（文化的）「ヘンな日本人」、との認識が彼らをとりまく他の一般の子供や大人の間にある。帰国子女を受け入れる側である日本文化の問題は章を改めて検討する（二章）が、とにかく彼らをとりまく環境は帰国子女への周囲の者の態度、考え方という点で同質的であり、それが帰国子女文化の形成と維持に貢献している。つまり、自己の持つマルチ・カルチュラルであるという同質的な特質と、日本の画一性志向（後述）という同質的な環境が相互に絡み合い、作用し合って帰国子女の文化がつくり上げられていく、と考えられる。但し「帰国子女文化」は筆者自身の帰国子女調査や在外経験の印象などから経験的に導き出した仮説に過ぎず、彼らが単に最終的には日本文化に同化されてしまうのか、それとも帰国子女文化の成員として少しでもその特色を持ち続けるのか、の実証的検討は今後の成果に待たねばならない。しかし、特に自己のアイデンティティの点などで帰国子女の次の様な意見を聞く時、帰国子女文化という、周縁的で両義的な性格をもつサブ・カルチャーの存在の感を強くする。

「私に誰かが『あなたは日本人ではないか』というと、それを否定したくなるのである。」（星野、1980a：228）（傍点筆者）

つまり、九年間の在米経験のあるこの十九歳の女子学生は、自分が日本人だということを否定するのではないが、肯定するでもない、否定したいのである。自己アイデンティティということに関して帰国子女はおそらく、日本人に近い者から現地人に近い者までの連続体になるだろうが、この両義性こそ帰国子女文化の特徴の一つなのである。

帰国子女の社会・教育環境

帰国子女教育が特別なものとして日本で問題化する背景の一つに、日本の教育の中に帰国子女がそのままではすんなりとはフィットしない、という事情がある。筆者の滞在していたアメリカのある小学校や幼稚園では、それらがキャンパス・タウンにあったために、何十ヶ国もの留学生や外国人研究員の子女が在籍していたが、初期を除いてこれら外国人子弟が、日本の帰国子女の様に、特別クラスに編入させられたり、他の子供達とは異なるプログラムの下に置かれたりといった、特別扱いされることは見当たらなかった。この様にアメリカでは教育の面において異質なものに対する包容力があり、その教育プログラムの中に異文化の子弟が無理なく受け入れられる状況ができ上っていた。これに対して、日本では教育方針の性格上（第二章参照）、より狭い範囲を対象にしたより画一的な形の指導法がとられている。そのため帰国子女を受け入れ適応させるための指導、適応教育はどうしても同化教育にならざるを得ない面を持つ。最近は帰国子女の異文化体験を積極的に肯定し、受け入れる側の子供達にも異文化への受容力を身につけさせようという新たな試みがなされているが、これを体系的に教育の中に定着させるにはまだ道のりは遠く、適応教育イコール同化教育とする傾向は日本文化の特質に根ざしたものであるために、同化的教育方法は根強く維持されていくだろう。

帰国子女に対する同化への圧力は教育以外の生活環境においても見られる。つまり、生活様式の幅広い多様性を許さないのである。特に子供の場合「目立つもの」、異質なものに対する制裁という形で同化の圧力が加えられる。例えば服装については日本の多くの中学、高校で制服の着用が制度化されており、私服着用の場合でも「特異な」服装は許容されない。アメリカで見られるインド人などの男性の「スカート」は日本では笑いの種になるだろうし、それほど顕著でなくても半袖と長袖、半ズボンと長ズボンの差を見つける鋭い目を子供達は持っている。長ズボンをはいて日本の学校に登校した帰国子女が「小学二年生のくせに。」と皆にからかわれる、といった異質なものを排除する力、同化の圧力が帰国子女をとりまく生活環境の中に厳としてある。その圧力は帰国子女の言葉使い、行動の面に対してもかかってくる。帰国後編入された日本の小学校で全校生徒の前で「コンニチワ、ハジメマシテ」と挨拶した、あるカナダからの帰国子女が皆に大笑いされた。本人には笑われた理由が分らず途方に呉れたが、笑った側の子供達は口をそろえて「朝なのにコンニチワはおかしいし、ハジメマシテは子供の使う言葉ではない。」と指適した。加えて発音もおかしかった、と言う。これは決して珍しい例ではなく日本には毛色の違うものを「はじき飛ばす風潮」(朝日新聞一九八三年十月二十五日付)がある。前述の十九歳の女子学生の「自叙伝」の中にも「アメリカに行っていた(ことに対する)嫉妬心からか、クラスの子には本当によくいじめられたり、いやみを言われたりした。」(星野、op. cit.: 227)とあるが、これはアメリカに行っていたという事実そのものよりも、その結果身についた言葉使いや行動その他の異質性に対する周囲の反応であろう。これに対する彼女の防衛策は「アメリカに行っていたことをかく」(ibid.)することであった。この様な「息をひそめて、声も出さずに生き」(中津、1976)る帰国子女が多いという事実は同化の圧力の強さを物語っている。帰国子女に対するこの同化の圧力は、彼らを受け入れる日本文化のどの様な性質の表われなのであろうか。次章では帰国子女を受け入れる側の日本文化の特質についての考察を行なう。

第二章　帰国子女を受け入れる日本文化

日本文化の「人種」観

帰国子女に対する同化への圧力に比べ、いわゆるガイジンに対しては比較的同化の圧力が弱いのはなぜか。この問題を考慮しつつ日本文化の「人種」観の一側面を明らかにしていく。一般の日本人の、帰国子女に対する考え方は、「この子供達は日本人なのだから日本文化の中で受け入れられるためには日本人らしく振る舞えるようになるべきだ。そうできない子供達は『ほんとうの』日本人になり切れない『ヘンな』日本人でしかない。」といったものである。つまり帰国子女の異質性は二重の構造を持っている。もし彼らがいわゆるガイジンの様なひと目見て異なる容姿をしていれば、彼らの逸脱行動は受け入れられたはずである。しかし日本文化は日本人の外見を持つ人に日本人的行動をとることを要求するため、これが圧力とな

る。というのも帰国子女はレッキとした「日本人」になれる可能性のある者でありながら「日本人」になり切っていない、との考えが作用しているからである。ここに日本文化の人種観、日本人観が窺える。日本文化においてある者が日本人として認められるためには生物的要件かつ文化的要件を満たしていなければならない。（左図②）

〔文化的要件〕＼〔生物的要件〕	日本人	非日本人
日本人	A	B
非日本人	C	D

右図においてAがいわゆる「日本人」、Dが「ガイジン」である。在日朝鮮人や「ヘンなガイジン」と呼ばれる者はBのカテゴリーに含まれる、生物的には日本人でないが日本文化を身につけている人達で、彼らは「まるで日本人と同じだ。」とか「もう何も日本人と変わらないみたいですね。」と呼ばれる域にまでは達し得るが、「日本人」にはなれない人である。これと対照的に、Cのカテゴリーに含まれる帰国子女は基本的には「日本人」になれるはずだが、まだなっていない者、つまり「ヘンな日本人」として受け取られる。この二つのカテゴリーに属する者に対する考え方からすると、「日本人とはなにかということの、支配的要因は、身体的特徴〔生物的要件〕にあるのではないだろうか。」（我妻その他、1967:148）つまり、生物的要件は文化的要件③の先要条件であり、文化的要件の充足は生物的要件充足の当然の帰結だ、とするのが日本文化における特に「日本人」に関する人種観である。従って文化的要件のみを満たすガイジンは日本人になれないし、生物的要件を満たす帰国子女は文化要件を満たすはず、その潜在能力を有すると考えられ、同化の圧力が加えられるのである。

日本文化の画一性志向

日本人であるためには先ず生物的要件が足り、かつ文化的要件をも満たすこと、という「人種」観があったとしても、もしこれらの日本人のための要件がゆったりとした、範囲の広いものであったならば不適応の者を多く出すほどのこれほどの同化圧は感じられなかったはずである。しかし現実には「日本人」であるための要件、特に文化的要件④は多様性の少ない画一的（homogeneous）なものであり、画一性志向（homogeneity-oriented）なものであって、それが帰国子女に同化を迫る基盤となっている。日本文化が画一的だという指摘はそこここに見られ、ほぼ「社会常識」化している。例えば米山はこう表現している。

「日本の一種の均質性というか、まとまり（私は普通、一人種・一言語・一文化というような言い方をするのですが）をもった場所はほかにはないのです。……（中略）……日本はよそと比較にならなら

ないほど均質性が高いということは、否定できないと思うのです。……（中略）……それほど緊密な均質性、ホモジナィティを持った、ホモジィニアスな国民なのではないかというのです。」（1973:198-199）

しかし日本文化が単一文化で均質的だという「社会常識」に対する批判、反論も見られる。別府は「日本人は日本文化の中に異文化のあることを認めない」（星野、1980a:27）のであって、常に日本文化が単一文化であった訳ではない、と指適する。日本人は「朝鮮文化・アイヌ文化などを認めず同化しようとしたし、琉球語（に示される文化の様式）を別の言語（や生活様式）とみなさず、日本語のバリエーションとみなしたりする。」（ididd.）そして「日本人の中には逸脱的な非正統に対するおびえがある」（ibid.）とした。これが画一性志向である。日本文化の「画一性」は画一性志向と表裏をなすものであり、画一性と画一性志向は相互に作用しながら強まっていく。ある文化にある程度画一性、正統性ができ上っていくと、異質なもの非正統なものに対する矯正力、すなわち画一性志向が働きだし、画一性志向によって今度は画一性がますます高められていく。そして画一的な文化は画一性をより志向する、という循環である。そのため帰国子女は同化の圧力にさらされることになるのである。

日本の教育制度

帰国子女を受け入れる日本文化の画一性、画一性志向は、彼らの生活に特に関わりの深い日本の教育、とりわけ学校教育にも顕著に表われている。比較教育学の立場から沖原は教育の制度と内容の、両面の画一性を日本の教育の特色の一つだとする。（1973:148-52）

彼によると、制度の面での画一性（志向）は第一に学制に表われている。日本では大都市から全国津々浦々に至るまで六・三・三制が普及しているがそれがお手本としたアメリカなどでは地域によってバリエーションがあり、六・六制、八・四制など様々なものがごく一般的に見られる。第二は教育委員の任命制である。アメリカでは教育委員が公選によって決定されるところもあれば任命制のところもある。しかしこの点でも日本では画一的に制定されている。第三は進級制度である。法律的には日本の義務教育課程においても落第（原級留置）はあり得るのだが、現実の問題としてそれは全くの例外的措置であり、また飛級の制度もない日本の進級制度は「年功序列的であり、画一的であると言うことができ」（ibid.151）る。沖原の指摘する四番目の事例は公立校の男女共学である。共学、別学の是非については各国とも見解が異なり、世界の国々では様々な方法がとられているが、日本ではほぼすべての公立校で別学が認められず、「きわめて画一的に男女共学が実施されている。」（ibid）

教育の制度面のみならず、その内容面においても――そしてこれが海外帰国子女に「学力」的同化を求めるより強いファクターなのだが――日本の教育は画一的である。

「わが国では、学校で教える科目、授業時間数等は学校教育法および同施行規則により定められ、また教育課程の規準は学習指導要

領（文部省告示）によって設定されています。したがって、日本の学校では、全国どこの学校でも同一の教科目が教えられており、その教育課程も、国の基準のわく内で地方の特性に応じたものを編成することができるようになっているにもかかわらず、実際には国の基準に基づいた画一的なものが実施されています。……（中略）……わが国の学校の現状は、そのような教育（生徒の適性・要求に応じた教育）の多様化の要素からはほど遠い状態です。……（中略）……日本の学校では、画一的なカリキュラムという鉄の寝台に生徒をしばりつけ、できない子供は背伸びをさせ、できる子供は足踏みさせ、いずれも生徒の個性や能力を殺してしまっているとはいえないでしょうか。」（ibid：152）

この画一的なカリキュラムの下の教育が、教師に「帰国子女は一斉授業の邪魔」だとか「（中三の夏休みに国外の父親の任地に行く生徒に対し）大事な時期に一ケ月も外国に行くのならもう（受験の）責任は持てない。」と公言させるまでに至っている。帰国子女教育といえどもこうした日本の教育原理に基いたものであることに変わりはなく、この様な教育の場における画一性志向が帰国子女の適応教育を同化教育に近似させてしまう背景をなしているのである。

日本文化という同化圧の強い環境におかれた彼らはどの様な経過をたどって適応していくか、或いは不適応になるか、次章では帰国子女の適応の問題に焦点を当てていく。

第三章　適応とコミュニケーション

適応の概念

我々の使用する適応という言葉はもちろん、文化的適応の意味で使用しているのだが、元来それは生物的適応の概念であり、文化的適応はそれからのアナロジーである。生物的適応とは「生物のもつ形態学的ならびに生理学的性質が、その環境のもとでの繁殖に適合していること、または適合していく過程（とくに進化の過程で）」（岩波生物学辞典、一九七二年版：699）である。つまり、生物が個体と種族の保存のために新しい環境に自己を合せることである。同様に文化的適応も、ある主体の新しい環境、すなわち異文化の中に身を置いた時の環境への適合（過程）を指している。では生物的適応の「繁殖」に対して、文化的適応は何を目的としているのか。それは、何をもって適応したとするか、との問いかけと表裏一体となっている。一九七六年の文部省による帰国子女の大量調査は、帰国後の学力、日本語能力と、在外中の就学形態、帰国後、出国以前の就学形態、期間、年令等との関連を示唆している。これは帰国子女の適応をことばと学力、とりわけ学業成績に絞った考えを根底に持っていることを表わす。この、ことばと成績の適応をもって帰国子女の適応とする風潮は、帰国子女の周辺、両親や現場の教師に強いようである。これに対し小林は、適応はそれにとどまらないことを示している。彼は適応の状態を、「生活に慣れる」（1981：74）ことと定義する。慣れる状態には「一つには身体的に慣れること」（ibid）がある。それから「友だちと慣れ」（ibid）「学

校の生活に違和感がなくなる」(ibid.:76)ことがあり、さらには「授業についていけること」(ibid.)がある。これらを総合すると文化的適応、特に帰国子女のそれには、からだの適応、ことばの適応、友だちの適応、学力(授業)の適応、学校生活の適応などがある。これらを通じて、適応とは「慣れること」と小林は称したが、筆者は適応をコミュニケーション③のギャップの解消(過程)、或いは解消したと感じられる様になること(過程)だと捉えている。言い換えれば、環境の中での支配的なコミュニケーション体系の理解(その過程)である。長島は「カルチュア・ショックの大きな形成因はディス・コミュニケーション(コミュニケーションの失敗、断絶)にある」(1980:42)としているが、これはつまり適応とはディス・コミュニケーションのないことを意味している。海外経験を通して帰国子女は、程度の差こそあれ、日本文化のコミュニケーション体系とは異なった体系を体得して帰国する。異なる体系がぶつかり合えばそこにディス・コミュニケーションが生ずるのは当然であり、それをいかに解消していくかが彼らの適応の問題である。適応とディス・コミュニケーションの問題は後に節を変えて扱う。

適応と同化

前に帰国子女の日本での適応教育は同化教育になっていると述べたが、適応と同化について、その共通点と相違点を上記の適応の捉え方にのっとって明らかにしておこう。

端的に言えばその違いは、文化的適応の主体(帰国子女)が持ち帰った文化(コミュニケーションの体系)が主体の中に帰国後も継続して維持されるかどうか、に集約される。適応教育は帰国子女に日本文化(日本のコミュニケーション体系)を理解させ、植え付けていくだけでなく、在外経験によって帰国子女の中に培われた現地文化を積極的に肯定し、それを帰国子女自身かつ受け入れ側の子女らの成長にプラスにしていくことを含んでいる。同化教育はそれとは逆に、帰国子女の異文化を否定し(或いは、少くともそれを評価せず)棄捨させることによって日本文化を植え付けていこうとする。コミュニケーション体系のうちでも分り易く、また従来から常に問題にされてきた言語を例にとりあげれば、同化とはモノリンガルからモノリンガルへの移行過程であり、適応とはモノリンガルからマルチリンガルへの移行過程である。より具体的に言えば、イギリスからの帰国子女の英語力を維持する努力はせずに日本語力をつけさせるのが同化教育であり、日本語力の増強に加えて英語力も維持させる教育が適応教育である。要するに、適応教育も同化教育も帰国子女に対して新しい環境である日本文化のコミュニケーション体系を獲得、理解させることを目的とする点では一致しているが、その際帰国子女が既に獲得している異文化のコミュニケーション体系を一切廃棄するか、そのまま維持するかに、この二種類の教育の目標の違いがある。

コミュニケーション体系の捉え方

適応を異なるコミュニケーション体系間のギャップの解消と捉える基礎として、コミュニケーション体系についての筆者の考え方を

明らかにしてみたい。第一に、コミュニケーションを体系として捉えているという意味は、コミュニケーションは分析のレベルでいくつかの部分、要素に分けることができ、各要素は互いに有機的に関連し合い、作用し合うものだが、現実のレベルでは統合性をもった全体を成している、ということを表わす。また筆者の扱うコミュニケーションのレベル、範囲は、海外帰国子女という限られた対象を扱うための恣意的に限定された、かなり狭い領域である。すなわち、ここではコミュニケーションを、複数の人間が物理的に共通の場におり共通の問題に関わっている場合のコミュニケーションに限っている。一般的におそらくこれは直接的（対面的）コミュニケーション（face-to-face communication）と呼ばれるものに近いであろう。これからは、映画や本、新聞等のマス・コミュニケーション、また手紙、電話等の遠隔地間コミュニケーションなどが除外される。これらの種類のコミュニケーションに関して海外帰国子女に問題がないという訳ではなく、事実多くの問題があろうが、対面的コミュニケーションは彼らの適応に関してより深刻な問題の様である。つまり、文化不適応には、個別的、対面的接触において陥る度合が高くなるため、そこに焦点を絞りたいのである。

また文化的適応をコミュニケーション・ギャップの解消の視点から眺めるために、筆者の取り扱うコミュニケーションはホールの言う個別文化的（1966: 101）行動に注目したものになることも明記せねばならない。ホールによると人間の行動は三つの側面から眺められる。下位文化（infracultural）行動は、行動の進化的、系統発生的側面であり、前文化（precultural）行動とは行動の、人類に普遍的なレベルの、主に生理学が扱う側面であり、個別文化的行動とは行動の、各文化によって規定された側面である。（ibid.）例えば、人間の「歩行」という行動をこれら三つの側面から眺めてみると、下位文化的にはこれは、単細胞生物の移動や四つ足動物の四足歩行など他の種のロコモーションとの関係で、二足歩行（bipedalism）の点から注目されるだろうし、また前文化的に見た歩行は、例えば歩行に用いられる全身の骨や筋肉の構造、機能といった点が強調されるかも知れない。それに対し個別文化的に歩行に注目した場合、そこでは歩行の文化差が強調される。アメリカ人の中には「日本人の歩き方は波と戯れている様（wading）だ」と表現する者がある。またある黒人は筆者に「アメリカの白人と黒人の歩き方はひと目見て違う。黒人はリズムをからだ全体で表わしているから。」と述べた。この様に我々は、帰国子女のコミュニケーション行動を個別文化的側面から注目していくのであって、人類に普遍的な側面や他の種との比較から見るのではない。

コミュニケーションが体系であり、様々な有機的に関連し合う要素から成っているのだとすると、対面的コミュニケーションの個別文化的行動はどの様な構成要素から成り立っているのだろうか。

筆者のインタビューしたドイツから帰国したある小学生は、「こっち（日本）の子供達は約束を守らない。平気で破るのには本当に腹が立つ。」と憤懣を訴え、「どうしてあんなに簡単に破れるのか」と理解に苦しんでいた。我々もいつも約束を破って平気な訳ではなく、

厳格に守るべきもの、守らなくとも許されるもの、始めから守られると思っていないものを区別し、理解している。またドイツを初め、西洋諸文化においてもリップ・サービスの様な履行を前提としない約束がある。ではなぜドイツ帰りの彼は怒ったか。彼には日本人の間での「約束」に関する認識、時間の観念、ことば以外の表情やしぐさ、声の調子など、その約束がどの程度守られるべきものであるかを決定するシステムが分っておらず、その時の状況を自分のシステムで解釈したために誤解が生じたのである。その証拠に、この「○時に○○で会おう。」という約束は彼と四～五人の日本人の間でとり交されたが、彼以外は誰一人として姿を表わさなかったのである。つまり彼以外には、この約束が必ずしも順守する必要のないものだと心得られていたのである。システムの違いによる約束に関する誤解を、中根はこう語る。

「日本で生活していても、実際、約束が守られないことはいくらでもある。そうしたとき、同じ日本人でも、東南アジアで約束が守られなかったときのように、ひどく怒ったり、相手を軽蔑したりしはしない。それは、約束が守られなかった背景となる理由がよくわかっていたり、その守られない範囲（度合）というものが慣習的にわかっていたり、また、どうしたら、相手に実行させることができるかという方法を知っているからである。……（中略）……一定のシステムのない社会というものはない。……（中略）……外国人がうまくいかないというのは、決して相手が悪いのではなく、外国人がそのシステムを知らないからである。」（1972: 23）

約束を結ぶシステムは、本論で扱うコミュニケーションの体系の好例である。この例からも分る通り、コミュニケーションはことばによってのみ行なうのではなくそれ以外のもの、すなわち非言語的コミュニケーションも介在している。それを頭に入れておかないと「ことば」に裏切られることも出てくるのである。そして右にあげた、時間や表情、しぐさ、声の調子等がことばとともにコミュニケーションの構成要素として全体として統合された体系をつくり上げている。周知の通り海外帰国子女の適応は言語の面からは十分意識され、取り上げられているが、ことば以外の非言語的コミュニケーションの面からはシステマティックな研究が殆んどない。そこで、ここではコミュニケーション体系はことばとともに非言語的な面もあり、さらに非言語的なものには（相互）行為者自身に関するものとコンテクチュアルなものがある、ということを強調したい。しかし前述した通り、コミュニケーションの体系は言語、非言語の両方が包括され、相互に作用し合っている全体としてまとまったシステムであるから、その一方のみに注目し他方を無視する、ということはできない。これをキネシックス⑥の分野の開拓者、バードウィッスルは次の様に語っている。

「私は、研究の結果、言語学的システム或いはキネシック・システムのどちらか一方のみをコミュニケーション・システムと呼ぶ気がなくなった。抽き出されるデータはどれも言語学とキネシックスがコミュニケーションのサブ・システムであるという主張を支持している様である。この二つ（のシステム）が相互に関係し合い、さら

に他の感覚に基いた類似のシステムと関係し合うことによってはじめてコミュニケーション・システムが出来上るのである。」(1967:71)

それでは、コミュニケーション・システムを構成するサブ・システムは具体的にどの様なものがあるだろうか。

コミュニケーションのうちでも、ことばの側面に関しては、言語自身のシステムと話される音声に関するシステム(7)の二つがある、という点で研究者の意見の多くは一致する。しかしその他の、いわゆる非言語的コミュニケーションのサブ・システムについては、あたかも研究者の数だけ分類があるかの様である(8)。その中で、従来の業績をふまえた上で、比較的システマティックな分類であり、筆者の考えている対面的行動の個別文化的行動の分類に最も近い、西江の「七種類の基本的な伝達構成要素」(1976(1):85)をコミュニケーションのサブ・システムの分類の例として次にあげてみたい。以下はその概略である。

一、ことば　二、身体の動き(姿勢と動き)　三、人物の特徴(体格・性格と附加物)　四、空間と時間　五、環境　六、社会的な背景(社会構造と社会組織)　七、感覚　(ibid.:85-86)

右表の中で一の一部が言語的側面、それ以外が非言語的側面ということになる。非言語的なものには二、三、七のように行為者に関するものと四、五、六のようにコンテクスチュアルなものとがあることが示されている。但し、西江の分類は「四、空間と時間」について、なぜ空間と時間をひとまとめにしたのか、この二つは別々のシステムとした方が分り易いのではないか、とか、「七、感覚」についても果してこれがひとつのシステムとして成立しているのか、嗅覚、触覚などより細分化すべきではないのか(9)、などの疑問が残る。いずれにしろ、大筋においてはこれらが筆者の問題にしているコミュニケーションのサブ・システムであり、海外帰国子女の適応の問題を検討するためにはこれらのひとつひとつを異なるシステムの接触という点から考えていかねばならない。さらに各構成要素は「〝伝え合い〟の中ではどれ一つとして独立して現れることは決してない」(ibid.:86)く、「七つの要素が、各々の占める割合の差こそあれ、全部同時に共存することによってはじめて、一つの〝伝え合い〟の実例が成立しているのである。」(ibid.(4):81)さらに「一つ一つの要素の成立すらが他の要素とのからみ合いの中でなされている」(ibid.:86)のであり、「言うならばこれらの七つの要素とは、一つの〝伝え合い〟の実例を観察する場合に有効な七つの視点なのである。」(ibid.(3):84)

換言すれば、コミュニケーションの体系は先ずこうした多くの相互に絡み合い関係し合った要素から成る、という統合的視野(holistic view)をもって扱うと同時に、その中のサブ・システムに焦点を当て深く扱う際にもそれは他の要素とのからみで成り立っていることを肝に銘じておかなければならない。海外帰国子女のことばの問題、日本語習得の問題を扱うにしても、ことばはその音声的特徴やその他非言語的要素とのかかわり合いがあって初めて成立していることを理解した上で扱わないと、現実の場面のことばによるコミュニケーションのギャップの研究は困難である。前に取り上げた、

朝礼で「コンニチワ、ハジメマシテ」と挨拶して笑われた帰国子女の話はその一例である。「コンニチワ」が発せられる背景の一つには日本語の挨拶は日本文化の時間のシステムに深く関わっているという事実があり、「ハジメマシテ」の背景の一つには、そのことばが使用できる社会構造の範疇がある、ということがある。この様に、ことばを扱う時も常に統合的な視野は、他のサブ・システムを扱う時と同様、必要不可欠なものである。

適応とディス・コミュニケーション

帰国子女の日本文化への適応の問題は、日本文化に固有のコミュニケーション体系の理解と獲得の問題であることをこれまで明らかにしようとしてきた訳だが、ではどの様な場合帰国子女は適応に「失敗」する、すなわち不適応となるのだろうか。既述した様に、長島はカルチュア・ショックの原因はディス・コミュニケーションにある、と主張するが、彼は何がカルチュア・ショック[16]を引き起すと言っているだろう。彼によればそれは大別すると三種あり、(1)他文化の論理的理解に失敗した場合、(2)自分を相手に理解させることに失敗した場合、(3)それまで妥当と思い込んできた規範の妥当性に疑いを抱くような事態に出会った場合、の三つである。(op. cit.)

(1)は帰国子女のみならず、異文化と接触する人なら誰でもすぐに直面することであろう。先に触れたドイツからの帰国子女の「約束」の例はこれに該当する。帰国子女、特にある程度日本語能力を備えている者にとっての問題の多くは、(2)の自己を理解させることの失敗によるショックではないだろうか。マルチリンガルな帰国子女はことばによるコミュニケーションが比較的可能なため、非言語システムの違いにより気づきにくいと考えられる。(1)の様な受動的な行為の場合はそのギャップが比較的表面化しにくいが、(2)の場合（能動的行為）、ギャップが明確になりコミュニケーションの失敗が起りやすくなる。さらに、帰国子女に関わりが深いのは(3)の場合である。とりわけ日本人学校に通ったり、家庭で日本語を使ったりして日本文化にある程度通暁しているつもりの帰国子女は、帰国して日本文化に直面すると、改めて自分がいいと信じていた「日本文化」のイメージと現実の日本文化のずれを前にショックを起す例がある。それが(2)の場合であれ(3)であれ、帰国子女の適応の問題は、ある程度日本文化が分っているつもりの者の方が、ある意味ではショックはより深刻なものとなる。

以上のことを考慮すると、帰国子女のカルチュア・ショックの形成因としてのディス・コミュニケーションは、それがより無意識であるという点で非言語的コミュニケーションのギャップがより重大なのではないだろうか。言語的なシステムの違いは容易に感知できるものであり意識的であるため、従来より多く研究の対象となってきたし、文部省（前出）も学力とともに言語の能力を適応のめやすとしているぐらいである。しかし、既述した通り、ことば以外のコミュニケーションは、ことばによるものと密接に関係し、それのコミュニケーション体系の中での役割はことばと同様、或いはそれ以上のものである。長島のカルチュア・ショックの分類を帰国子女に

ついて考えると、(1)はもとより(2)、(3)についても非言語的ギャップが深く関与していることは明らかであり、そのため言語面での適応に併せて非言語面での適応、すなわちコミュニケーション・ギャップに注目していくべきだ、というのが本稿の強調点の一つである。

第四章　帰国子女研究の方法論的考察

帰国子女研究のイーミック・アプローチ

帰国子女の適応、言い換えれば帰国子女のコミュニケーション・ギャップの問題を特に非言語的側面から考える必要がある、というのであればそのためには、どの様な方法で問題にアプローチするのがよいのであろうか。

帰国子女というひとつの文化的にまとまりのある対象[11]の、普段は意識の上にのぼらない非言語的コミュニケーション、というものを扱うには、認識的アプローチ（cognitive approach）が有効ではないだろうか。というのも、「できるかぎり個々の社会に個有の範疇を抽出することで、いわばひとびとの思考過程まで把握しようとする」（合田、1982: 16）認識人類学の基本的な理念と方法論が、帰国子女文化に固有のコミュニケーション体系を導き出そうという我々の目的に合致しているからである。

認識人類学は「できるかぎり個々の社会に個有の範疇を抽出する」(ibid.) ために、イーミック（emic）なアプローチに第一位的な意義を置いている。イーミック・アプローチは「文化固有の特徴や特質を指向し、そこに独自な基本概念によってその文化を記述し、理解しようとするアプローチ」（星野、1979: 139）であり、人類普遍の概念で文化を捉えようとするエティック（etic）・アプローチの対概念である[12]。そしてこれが従来の帰国子女研究に欠けがちであったもので、彼らをコミュニケーションの視点、文化の視点から眺めるためには子供自身の中に視座を求めていく必要がある様に思う。例えば帰国子女をいくつかのカテゴリーに分類する際に、我々は弁別の次元として性別、年令、在外期間等、エティックな概念を考えてしまう傾向がある。が、「浮浪者」には浮浪者自身の分類があり、(Spradley, 1972)「ビール」にはビール飲みによる分類がある（Hage, 1972）様に、帰国子女にも彼ら自身の特有の分類基準があるように思われる。例えば、日本人であるということを意識する者とあまり気にしない者の区別、すなわち自己アイデンティティの基準は彼らにとって重要な意味をもつ対比次元の様に見える。ワックスの第二次大戦中の日系人キャンプについての報告（1971）によれば、日系人は日本に忠誠を誓う者とそうでない者の二集団に分れ、その対比はかなり明確だったらしいが、帰国子女達もまた、自己アイデンティティを一つの重要な基礎として互いに接し合い、範疇化し合っている様に見える。そして、これは多かれ少なかれ、アイデンティティの危機にさらされている人々にとっての一般的傾向の様である。

非言語的コミュニケーション研究の課題

最後に、我々は帰国子女の固有のシステムの中から、何をどのよ

うにして知ろうとしているのかを、例をあげながら若干述べておきたい。但し、帰国子女の非言語的コミュニケーションに関する研究はこれまで殆んど体系的なものが見られていないし、筆者自身も本格的な調査を行なうには至っていない。ところが演繹的（inductive）アプローチを優先する（認識）人類学において何を知るか、は本来フィールドの中で発見していくはずのものである。従って以下には具体的な問題を挙げていくのではなく、間題の枠組になり得る課題を提供したいと思っている。

世界各地から帰国する子供達のコミュニケーション体系の研究には、ホールの提唱するプロクセミックス⒀が示唆的なものの一つである。例えば、彼は文化によって重視されるコミュニケーションの回路が異なっていることを実証的に示している。(1963, 1974) 嗅覚的回路や触覚的回路は我々日本人にとっては聴覚的、視覚的回路と比較して、それほど重要でないが、アラブ人にとってはそれらがコミュニケーションに重要な役割を果す、(Watson, 1970) というのはその一例である。様々な文化を身につけて帰国する子供達は、各コミュニケーション回路の重要性において多様性があり、例えばコミュニケーション回路の彼ら自身による分類が、子供一人一人に固有の適応の問題を見つけ出す手掛りにもなるかも知れない。

ホールはまた文化によってコンテクスト度に差があることを問題にする。「人々が互いに深く関わり合っている……（中略）…… 高コンテクスト文化では簡単なメッセージが多くの意味をもって伝わっていく。」(1976: 39) 低コンテクスト文化では逆に、多くのメッセージが簡単な意味しか伝えない。ホールは高コンテクスト文化の例の一つとして日本（ibid.: 58）を、低コンテクスト文化としてドイツを（ibid.: 39）あげているが、前出のドイツからの帰国子女の「約束」に関するカルチャー・ショックはコンテクスト度の差も関係していただろう。彼の様に低コンテクスト文化から日本への帰国子女は特にこの種のコミュニケーション・ギャップが問題になるかも知れない。しかし、前にも述べたが、帰国子女文化は単にある文化から日本文化へと移動した者の文化ではなく、マルチ・カルチュラルな特性を身につけた者の文化である。従って、低コンテクスト文化から帰国した者の高コンテクスト文化、日本に対するとまどいは、単に低コンテクスト文化に属する人が日本文化に触れた際のとまどいとは異質のものであるはずである。我々は帰国子女の滞在した文化そのものを問題にしているのではなく、帰国子女の文化の認識体系を問題にしている。そこで、イーミックで演繹的なアプローチを基礎にした認識的アプローチが、帰国子女固有の認識体系の解明に不可欠になる。例えば先述した帰国子女の自己アイデンティティの問題の様に、帰国子女は周りの世界を特有のやり方、基準で切り取っており、その文化の理解は、切り取られた姿（民俗分類）や切り取る際の弁別基準（成分分析）の解明を通じて可能になるものだからである。

おわりに

全体を通じて本稿の論旨は結局次の三点に要約される。第一には、一つの統合性をもつ文化としての帰国子女研究の試みである。第二点は日本文化の特質との関係から見た帰国子女研究であり、第三点はコミュニケーション研究としての帰国子女研究であって、これがそれぞれ帰国子女の適応という視点から捉えられた。第一点に関して、マルチ・カルチュラルな「文化」というのは一見矛盾したようにも見えるが、この種の両義的な文化は移民文化や少数民族のアカルチュレーションなどに共通の問題としてしばしば見られるものである。ただ帰国子女文化の特異性は「マルチ」な文化の一方が一定でなく、多種多様であるところで、それが帰国子女を文化として捉えることを難しくしている点であるが、この点は第二の日本文化の特質である画一性志向によって補われ、周囲から帰国子女文化に統合性が与えられている。第三の、コミュニケーションの問題として適応を検討する視点は、新しいものではないが、従来の研究は言語によるものが中心課題であり、非言語的なものを含めた統合的な研究は今後の課題として残されている。現在のところ、この第三点を初めとしてそれぞれの論点には理論の未整備と方法論的困難がつきまとうが、将来の帰国子女の適応研究の確立のために、本論が何らかの問題を提起していれば幸いである。

註

(1) 例えば小林、1980:90 参照。

(2) この図は別府晴海の考えを参考にした。彼の講演のメモが星野、1980a に見られる。

(3) 但し生物学的要件、文化的要件とは厳密な科学的用語ではなく、日本文化の中に想定され信じられている民俗的概念である。

(4) これが民俗的概念であることに注意。

(5) コミュニケーションの考え方については次節参照。

(6) キネシックスとは人間がからだの動きとジェスチャーを通して、いかにコミュニケーションを行なうかを体系的に研究する領域である。(Birdwhistell, 1955:10)

(7) 音声に関するシステムの研究はパラ言語学と呼ばれる。例えば Trager, 1958 を参照。

(8) 例えば Ruesch et. al., 1956, Ekman et. al., 1969(a), Argyle, 1975, Knapp, 1972 等参照。

(9) 相手の触覚利用、つまり主体の接触行動を研究したものに Kauffman, 1971 がある。

(10) カルチュア・ショックに関しては研究者間に様々の定義があり、用いられ方も同一ではないが、適応できない状態、すなわち不適応と同一視しても特に異論はないと思われる。強いて違いをあげればカルチュア・ショックの方が一時的、といったニュアンスが強いが、これも研究者によって様々である。その色々な研究者の定義については星野、1980(a): 5-30 参照。

(11) 第一章参照。

(12) この考え方は言語学の一領域、音韻論(phonology)の中の音声学(phonetics)と音素論(phonemics)の区別をアナロジーによって文化の概念に適用したものである。詳しくは Pike, 1966 を参照。

(13) プロクセミックスについては Hall, 1966, 1976 を参照。

文献

(日本語)

合田濤(編)一九八二年『認識人類学』「現代の文化人類学第一号」至文堂

星野命　一九七九年『異文化間における社会心理学の研究方法と一般的問題』「人間探究の社会心理学　4人間と文化」（星野編）朝倉書店
星野命　一九八〇年(a)『概説　カルチャー・ショック』「現代のエスプリ　カルチャー・ショック」至文堂
星野命（編）一九八〇年(b)『帰ってきた私たち』「現代のエスプリ　カルチャー・ショック」至文堂
小林哲也　一九八〇年『海外帰国子女の適応』「現代のエスプリ　カルチャー・ショック」至文堂
小林哲也　一九八一年「海外子女教育・帰国子女教育」有斐閣新書
文部省　一九七六年「海外勤務者の子女教育に関する総合的実態調査」
長島信弘　一九八〇年『カルチュア・ショック』「現代のエスプリ　カルチャー・ショック」至文堂（初出一九七三年「教育と医学」慶応通信二一巻四号）
中根千枝　一九七二年「適応の条件」講談社現代新書
中津燎子　一九七六年「異文化のはざまで」毎日新聞社
西江雅之　一九七六年(1)～(4)、(6)～(11)『伝え合いの人類学』「言語」vol. 5, no.1-4, 6-11
沖原豊　一九七三年『比較教育学から見た日本人の特質』「日本人とは何か」（飯島宗一他編）日本経済新聞社
我妻洋・米山俊直　一九六七年「偏見の構造」日本放送出版協会
米山俊直　一九七三年『日本人の国民性』「日本人とは何か」（飯島宗一他編）日本経済新聞社

（英語）
Argyle, Michael 1975 *Bodily Communication* Oxford University Press
Birdwhistell, Ray 1955 "Background to Kinesics" *ETC* 13:10-18
——— 1967 "Some Body Motion Elements Accompanying Spoken American English" *Communication: Concepts and Perspectives* L. Thayer (ed.) Washington, D.C.: Spartan Books
——— 1970 *Kinesics and Context* Philadelphia: University of Pennsylvania Press
Condon, John 1980 *Cultural Dimensions of Communication* Simul press, Inc.
Ekman, Paul & W. Friesen 1969(a) "The Perspective of Nonverbal Behavior: Categories, Origins, and Coding" *Semiotica* 1:49-98
——— & ——— 1969(b) "Nonverbal Leakage and Clues to Deception" *Psychiatry* 32:88-106
Frake, Charles 1962 "The Ethnographic Study of Cognitive System" *Anthropology and Human Behavior*: 72-85 Washington: Anthropological Society of Washington
Hage, Per 1972 "Münchner Beer Categories" *Culture and Cognition: Rules, Maps and Plans* J. Spradley (ed.) San Francisco: Chandler Publishing Company
Hall, Edward 1963 "A System for the Notation of Proxemic Behavior" *American Anthropologist* vol. 65 no. 5: 1003-1026
——— 1966 *The Hidden Dimension* Garden City, N.Y.: Doubleday
——— 1974 *Handbook for Proxemic Research* The Society for the Anthropology of Visual Communication
——— 1976 *Beyond Culture* Garden City, N.Y.: Doubleday
Kauffman, Lynn 1971 "Tacesics, the Study of Touch: A Model for Proxemic Analysis" *Semiotica* 4:149-161
Knapp, Mark 1972 *Nonverbal Communication in Human Interaction* Holt, Rinehart and Winston, Inc.
Pike, Kenneth 1966 *Language in Relation to a United Theory of the Structure of Human Behavior* The Hague: Mouton
Ruesch, James and W. Kees 1956 *Nonverbal Communication: Notes on the Visual Perception of Human Relations* Berkley: University of California Press
Spradley, James 1972 "Adaptive Strategies of Urban Nomads" *Culture and Cognition: Rules, Maps, and Plans* Spradley (ed.) San Francisco:

Chandler Publishing Company

——— 1979 *The Ethnographic Interview* New York: Holt, Rinehart and Winston

——— 1980 *The Ethnographic Observation* New York: Holt, Rinehart and Winston

Trager, George 1958 "Paralanguage: A First Approximation" *Studies in Linguistics*: 13:1-12

Wax, Rosalie 1971 *Doing Fieldwork* Chicago: University of Chicago Press

Werner, Oswald and Joann Fenton 1970 "Method and Theory in Ethnoscience or Ethnoepistemology" *A Handbook of Method in Cultural Anthropology* R. Naroll *et al.* (eds.) Garden City, N.Y.: The Natural History Press